岐阜市立幼稚園における幼児教育の姿（を語る）

子どもたちは幼稚園で何をするの？

日本中の幼稚園や保育園，そこで子どもたちはどんなことをしているのか，先生方は何を目指しているのか，ご存知でしょうか。

幼児教育に対して，社会には多くの誤解があるようですが，1963 年の文部省・厚生省の共同通達で，幼稚園と保育園の教育内容は同じにすると決められています。さらに 2020 年から，幼稚園の教育要領，保育園の保育指針が新しくなりました。その中で幼稚園も保育園も（こども園も）幼児教育機関として同じ内容の教育をするということが改めて示されました。0～2 歳児は幼稚園にはいませんが，3 歳以上の教育については，ねらいも内容も同じです。ただし，幼児期の子どもたちが「教育」に適応できるのは，１日４時間程度ですから，彼らが長時間暮らす場である保育園では工夫が必要になります。家庭的な時間の流れが組み込まれています。そこが違って見える部分です。

繰り返しますが，幼稚園と保育園の教育目標は同じです。ですから当然ですが，幼稚園であれば国公立，私立全て教育目標は同じはずです。その目標は，ひとことで言えば「生きていく力を育む」ということです。幼児期における教育は，「幼児期の特性を踏まえ，生涯にわたる人格形成の基礎を培うために，環境を通して行うものであることを基本とする」と，国が示しています。「環境」を通して何をするのでしょうか。キーワードは「遊び」です。このことは世界の幼児教育のトレンドです。近年，欧米では，教育政策の中で「保育・幼児教育を最重視する」と宣言しています。幼児期の遊びの体験こそが，人間の一生にとって，どれだけ大事かということがわかってきたからです。

岐阜市立幼稚園の子どもたちと先生たち

私は，何度も岐阜市の公立幼稚園にお邪魔させていただいています。主な目的は，先生方の「園内研修」「研究」のお供をさせていただくことですが，ときには，岐阜市立幼稚園の子どもたち，先生方にお会いしたくて，そして幼児教育の真髄を勉強したくて訪問させていただくこともあります。ここには，日本の幼児教育の目指す世界，遊びの質の高さがあり，世界のトレンドが息づいているからです。

岐阜市の公立幼稚園では，登園から帰るまでの１日，子どもたちは基本的にやりたい遊びをして過ごしています。そんなに好きに遊ばせて大丈夫なのか？　遊んでいるだけでいいのか？

多くの方は，きっと，そう思うことでしょう。私は全国のいろいろな園を見せていただいていますが，その中でも岐阜市立幼稚園の子どもたちは圧倒的に「豊かに」「たくさん」遊んでいます。岐阜市立幼稚園では，文字通り「遊び中心の幼児教育（保育）」が繰り広げられています。

遊び中心って？

遊び中心の幼児教育っていうのは，放任とは違うの？

そんな声が聞こえてきそうです。

遊び中心の幼児教育とは，子どもが主体となって遊びを深めます。けれど，先生たちは，子どもを放っておくわけではありません。子どもが本気で遊びに没頭するためには，先生たちによるさまざまな「仕掛け」がたくさん必要になります。これは，何かを「教える」よりも難しく高度な技術です。子ども一人ひとり，その日，その場の状況などの全てが違うからです。

先にお話した岐阜市立幼稚園の「園内研修」や「研究」というのは，先生たちが，この「遊び」の援助を真剣に考えるための勉強会です。１年に何度も定期的に行っています。先生方は，紛れもなく幼児教育の専門家です。別の地域の公立幼稚園の先生が，岐阜市立幼稚園の「園内研修」にいらした際には，「うちの園では，ここまで深く子どもたちの思いを読み取ったり，遊びの援助や遊びの環境構成を丁寧に考えられたりできていないです。刺激を受けました。是非見習いたいです！」と話されました。

遊びは学び，です

先生から何かを教えてもらうのが「教育」だと考えている方は，とても多いと思います。遊んでばかりいたら小学校に行ったとき，勉強に困るんじゃないかと。

ある高校の先生が「異校種研修」にいらした際，帰り際に「今日は何もしない日だったんですね。」と言われました。子どもたちは目を輝かせて没頭して遊んでいた一日でしたが。

乳幼児に対しては，「教える」教育の効果は高くありません。ましてや「早期に教える」教育，「知識や技術を教え込む」教育には弊害も多いのです。一見すると，子どもたちは早くできるようになりますが，国際的なある調査によれば，そのような認知的な力は，９歳頃には相対的に目立たなくなり，追いつかれてしまうとされています。「後伸び」しないのです。

また幼児の運動能力を調査した研究では，体育指導の先生やその時間が確保されていて，子どもたちが一斉に同じことに取り組む時間の多い園と，一人ひとりが自分のやりたいことに取り組む時間の多い園では，後者のほうが運動能力測定の値が高かったという結果もありました。つまり，大人の指示を受けて運動する時間よりも，子ども自身が夢中で遊び体を動かしている時間のほうが，運動能力が育まれやすいというわけです。

乳幼児期の学びは，すべて子ども自身の「見たい」「さわりたい」「知りたい」「伝えたい」「やりたい」という欲求によって促されます。子どもの自発的な欲求に応える遊びの環境や，先生や子ども同士のかかわりが，幼児教育の最重要部分とされています。遊びの中の経験や感覚の積み重ねが「学習」であり「発達」になるのです。教育の質の確保が議論されていますが，幼児教育では，その中核は「遊びの質」です。

このように，就学前教育である幼児教育は，あくまでも「幼児期の教育」であり，「小学校に行くための準備期」ではないのです。

乳幼児期という階段を登る子どもたち

当たり前ですが，ひとは突然小学生になりません。こんな詩があります。「くまのプーさん」で有名なＡ・Ａ・ミルンの詩集「Ｎｏｗ　Ｗｅ　Ａｒｅ　Ｓｉｘ」　（周郷博訳）です。子どもの心理の発達をうまく表しています。

「ぼくは六つになった」
一つのときは　なにもかも　はじめてだった
二つのときは　ぼくは　まるっきり　しんまいだった
三つのとき　ぼくはやっと　ぼくになった
四つのとき　ぼくはおおきくなりたかった
五つのときは　なにからなにまで　おもしろかった
今は六つで　ぼくはありったけ　おりこうです
だから　いつまでも六つでいたいとぼくはおもいます

赤ちゃんの時期があって，ヨチヨチ歩きの時期があって，二語文を使って話し始め，自我が芽生え始め，ひとのことが気になり始め，いつでもなんでも衝動的でエネルギッシュに，独特な楽観性をもちつつも様々な世界がわかり始め，・・・それぞれの時期を階段のように登って，ときにはその場に踏み留まり，ときには戻り，そうしながら次の段に足を掛けると，そこが小学校１年生です。

けれど，もしかしたら，小学校までに何をしてきたのか，今，どの段階にあるのかよくわからないとおっしゃる大人，特に小学校の先生もいらっしゃるのではないかと思います。2018 年 4 月から施行された幼稚園教育要領には「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」が示されました。健康な心と体，自立心，協同性，道徳性・規範意識の芽生え，社会生活との関わり，思考力の芽生え，自然との関わり・生命尊重，数量や図形，標識や文字などへの関心・感覚，言葉による伝え合い，豊かな感性と表現，です。これら通称「10 の姿」は、幼児教育の 5 領域（健康，環境，言葉，人間関係，表現）の内容を踏まえた上で、子どもに身につけてほしい人間力・学びの基礎です。幼稚園教育において育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿です。小学校入学後も継続的に育まれていくことが望まれており，幼児教育と小学校教育の接続・連携強化を図るという願いも含まれています。

ただし，「10 の姿」は，幼児教育においては生活や遊びの中で醸成される「目安」であり、子どもの成長の「ゴール」「到達すべき目標」ではないことに注意が必要です。5 歳児に突然見られるようになるものではないため，幼稚園の先生たちは，3 歳，4 歳の時期から，子どもの状況や個人差に配慮しつつ，それぞれの時期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることができるような工夫を施しています。

岐阜の地に根ざし，仲間と共に園生活を楽しむ子どもたち

岐阜市立幼稚園では，子どもの自発的な部分を大事にしています。遊びには，その子どもの「やりたい」がありますので，　やりたいことをやりながら続けていくと，そこには実に豊かな学びが生まれます。積み重ねることで，考える力や工夫する力が育まれます。経験を積み重ねていけば，後に必ず生きていく力になります。先生たちは，自分からやってみる機会を保障することに，心を砕いています。

ある日，水道の蛇口で，一人の男の子が遊ぶ場面を見ました。そこでは，その子どもにとって初めての経験がたくさんありました。手を差し込むと水が様々な角度に落ちる，水がジョロに貯まると重くなる，重くなったらジョロの持ち方を変えないといけない，出す量によって水の温度や向きが違う，などなどです。彼は黙々と試行錯誤して遊んでいました。このとき，先生たちはじっと見守っていました。

縄跳びで遊ぶ場面もありました。子どもが納得するまで続けています。自分ができないことでも，できている友だちに刺激され，何度も挑戦しようという気持ちが生まれます。遊びでは失敗も許されます。自分のやりたいという気持ちを，大人である保育者に尊重された子どもは，他の子どもの気持ちも尊重できるようになります。このとき，先生はその子どもをたくさん褒めていました。

このような経験のすべてが，その子どもの頭の中にインプットされ，脳に回路ができていきます。脳に新しい回路ができることを「学習」と言い，回路が組み合わさり，システムとなって，いろいろなことに通用するようになったときのことを「発達」と称します。そのような経験が遊びの中にはたくさんあるのです。遊びの中だからできるとも言えます。遊びの中で学びの芽を育んでいるのです。

幼児期は，人間の成長にとって最も大事な土台づくりの時です。一枚一枚の葉が生長するには，豊かな土壌，温かい光，清らかな水が必要であるように，子どもたちが健やかに成長するには，よりよい環境，温かな仲間，心のこもった大人の支援が必要です。岐阜市の公立幼稚園には，その環境が広がっています。だからこそ，子どもたちの目がいつも輝いているのです。

愛知教育大学　鈴木裕子